

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

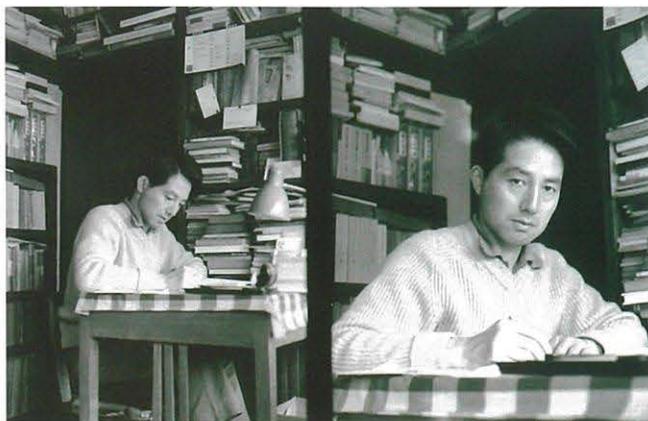
Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.42

発行日 ● 令和元年(2019)12月20日

もくじ

ごあいさつ・辻邦生没後20年に寄せて……………	1
祝文の話など……………	2~3
辻邦生山荘の軽井沢 「辻邦生生誕100年記念事業」のお知らせ……………	4



昭和37年(1962)頃 東京・国分寺自宅2階の書斎にて

ごあいさつ

辻邦生先生がお亡くなりになってから、今年で20年が経ちました。先生の自筆原稿や創作ノートなど、さまざまな資料を収蔵している学習院大学史料館は、本年6月に『辻邦生 永遠のアルカディアへ』を刊行しました。また、同月29日に開かれた史料館講座「没後20年 辻邦生を語る」では、坪戸雅彦先生と松浦寿輝先生に、辻文学をさまざまな角度から読み解きたいへん興味深い講演をしていただきました。辻先生の命日の前日である7月28日には、朗読会「声でつむぐ辻文学」を開催しましたが、4人の大学生が『廻廊にて』の登場人物になりきって、生き生きとした朗読を披露してくれました。

今なお多くの人々の心をとらえて離さない辻文学。このミュージアム・レターでは、辻先生とゆかりの深い方々が、辻文学の背後にある、先生の思想やお人柄などについてご紹介くださっています。貴重な原稿をお寄せいただき感謝申し上げます。

(史料館長・水野謙)

辻邦生没後20年に寄せて

辻邦生生誕100年記念事業組織委員会委員長
学習院大学文学部フランス語圏文化学科教授

中条 省平

辻邦生が亡くなったと知らされたあの夏から、もう20年が過ぎたとは。月並みながら、歳月の経過の速さには、目の眩む思いがします。

私が辻邦生の文学と出会ったのは、1972年、高校3年で『背教者ユリアヌス』を読んだときのことです。時間的にも空間的にもはるか遠い古代ローマの皇帝を主人公にして、こんなに生き生きとヨーロッパの精神的源流の風景を描くことができるなんて、と私は大きなショックを受けました。これほどスケールの大きな叙事的作品は、当時の日本文学のあり方からは想像もできないものでした。

高校卒業後、私は数年間、親をだまして大学に通っているふりをし、その後嘘がばれて、進退きわまりました。それで、ゼロからフランス語を勉強すると親に誓って、当時、日本でいちばん優れたフランス文学者を集めていた学習院大学フランス文学科に入学しなおしたのです。辻邦生はその教授の1人でした。

辻先生の講義の内容はあまり覚えていません。それよりも、授業のあいだにふと洩らす、「私は吸血鬼ですからね、若い皆さんの生き血を吸って生命力を蓄えるんです」とか、「今はこの瞬間一度きりですよ、後でとか、明日とか、そんなものはないんです」といった言葉にどきりとする興奮を覚えました。

その数年後、私は辻邦生の同僚になったのですが、研究室より映画の試写室の方でよく会ったような気がします。先生に誘われて試写の直前10分間で階下の中華料理屋に行きラーメンを食べたこともあります。ああ見えて辻邦生は大食漢なのです。それは、いま・ここで生きる喜びをただちに味わわなければならない、という哲学の実践だったのかもしれない。

辻邦生が亡くなって20年。その後、世界は歴史や哲学から真剣に学ぼうとはしない人々によって支配される度合いが高まっている気がします。こういう時代に、いま・ここで最善を尽くしてこそ永遠の喜びに触れることができる、という辻邦生の思想は、いっそうまばゆく光り輝くように思われます。

呪文の話など

三輪 太郎

小説家・文芸評論家・東海大学教授



出遣いは教科書でした。一九七九年、高校三年の夏のことです。

筑摩書房版の「現代国語3」に辻さんの「想像力と現実」という講演録(『北の森から』所収)が載っていました。内容は、作家が小説を書く根拠を見出すに至るまでの、いわば精神的オデュッセイアです。言葉が世界をなぞるのではなく、むしろ世界が言葉をなぞる、言葉が世界の形を生み出す、という常識の転換に目が裏返される思いがしました。

その日から、辻さんの本を猛然と読みだしたのですが、どれもこれもおもしろくて、ほぼ全ページに傍線や書き込みが入りました。抜き書き帳も作りました。ただし、タイミングとしては最悪で、大学受験が迫っているのに本を手放せず、翌年、見事に第一志望に落ちました。浪人しても読書の癖は癒えず、どうとう辻さんの母校への入学は叶いませんでした。

さて、時間は飛びます。本にかかわる仕事がたく出版社に入ると、新人ブーツキャンプの週刊誌編集部を経て、出版編集部へまわされました。担当作家表の自分の欄に辻さんの名を見出したときは、天から配剤された人生の幸福量を使い切ってしまったのではないかとひそかに怯えるほどでした。私は上司に内心の興奮を見透かされないよう苦労しました。ファンビ

理で仕事をされては困る、と担当を免ぜられるのを恐れたからです。

仕事上の思い出は尽きませんが、二つだけ告白します。ある日、気負いが昂じて大失敗しました。取ざかしいので、詳細はご勘弁ください。私はすぐに高輪の自宅へ飛んで行って陳謝しましたが、その帰りが深刻でした。とぼとぼ歩いて立ち止まり、とぼとぼ歩いて立ち止まり、公園のベンチで辞表をしたためました。深夜に社へもどると、無人のはずのフロアに上司が独り、待っていました。

「さっき、辻さんから電話があって、君が相当まいつているみたいだから、叱責はひかえてくれ、といわれた。辻さんの顔を立てて、今回の処分は見送る」

私はへなへなと床にうずくまりました……。

こんなこともありました。ある日、新刊の見本を軽井沢の山荘へ届けに行きました。編集者にとって一番うれしい時間です。山荘のテラスで一通り用件がすむと、辻さんが立ち上がり、「さあ、森へ、キュウセイコウコウセイしに行きましょう」とおっしゃる。何のことか、最初はピンとこなかったのですが、かつての旧制高校生のように哲学対話しながら森を散策しよう、という意味のお誘いでした。

夏の終わり、木漏れ日はすでに柔らかく、トンボが群れて滑空して行きます。そういえば、辻さんは夏の終わりが大好きでした。この季節、原稿が一番はかどるんだよ、とよく聞かされたものです。

哲学対話といわれても、私にはたいした話題提供もできません。でも、無言でいるわけにいけないので、最近の職場風景の変化を報告しました。パソコンが侵入して、データを駆使して効率を最大化するのが正しい仕事のやり方だという空気が、職場に蔓延しつつあった、そんな変化への漠たる不安を語ると、辻さんはこう応じてくれました。

「ご存知のとおり、辻の家は医家でね、実学本位なんです。そこへ突如、文学にのめりこむ男が出てきたものだから、親戚の集まりに行くとき肩身が狭い。文学道



パリ・デカルト街のアパルトマン。平成15年(2003)9月24日、「辻邦生 日本の小説家 1980-99年 ここに住む」と伝語で刻まれた在任記念プレートが設置された。(2階壁中央)

楽は人にあらず、という視線が悔しくてね。で、そういうとき、呪文を唱えることにしたんです。おまえたちもいずれ死ぬ。死ぬとき、おまえたちは実学と心中できるか、てね」

これが私にとって、終生忘れることのできない言葉になりました。文芸には現実を外から変える力はありません。しかし、現実を受け容れる心の態度を変える力はある、現実を内側から変える力はある、その確信が私たちの拠って立つ基盤である、だから、今までの仕事のやり方に自信を持ちなさい、と伝えたかったのだろうと受け止めました。俺は実学と心中できないが、文芸とは心中できるぞ、という作家としての覚悟表明だった、とも思います。

私が編集者を辞めたのは、三十六歳のときでした。辞めた理由の詳細はこれまた取ざかしいので、ご容赦ください。退職の挨拶に自宅へ伺うと、辻さん夫妻はにこやかに出迎えて、「餞別としてパリのアパルトマンの鍵を貸しましょう」といってくださいました。もちろん、社交辞令とは承知しながら、私はうなだれて、目をあげることができませんでした。

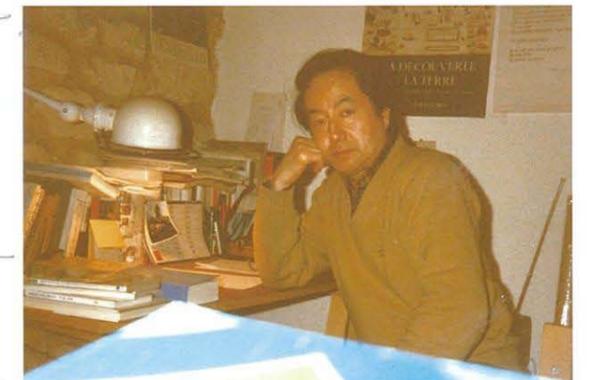
その後、生活に追われてパリへ行くどころではなく、うかうかと日を送るうちに辻さんが亡くなりました。報せを受けて、山荘へ駆けつけ、棺と対面し、佐保子夫人の前で泣きじゃくりました。山荘は夏の明

る木漏れ日に満たされ、風が吹き抜け、不吉な影など微塵もないのが不思議でたまりませんでした。

パリの土を踏んだのはその十年後、到着してすぐデカルト街のアパルトマンへ直行しました。冬の夜明け前、行き交う人の姿はありません。アパルトマンの前でぼうっと立っていると、冷気が足先から這いあがってきます。しかし、立ち去るのは惜しい。仕方なくコントロールスカルプ広場とアパルトマンとの間を、お百度でも踏むように往復しました。何度目の往復の後でしたか、突然、アパルトマンの一階通用口の扉があき、太鼓腹の中年男が中から出て来ました。彼は警戒の目で私を睨みすえ、腰に吊るした鍵の束をじゃらじゃら鳴らして寄ってきます。

「ムッシュウ・ツジ？」辻さんに会いに来たのか？と問われて、そうです、辻さんは私の師です、と拙いフランス語で答えると、男は急に人なつこい笑みを浮かべ、通用口の扉をあけて、入れ、と目で促しました。

敷居をまたぐと、薄暗い通路が奥へ延びています。剥き出しの粗石積みの壁を撫でると、ここに辻さんが暮らしたという事実の確かさが急に心に迫ってきて、その場にうずくまりました。すると、背後で扉の閉まる音がしました。コンシェルジュ(管理人)は親切にも、私を先生と二人きりにさせてくれたのです。闇のなかで私は、分不相応な幸福を得ながら途中で放棄してしまった身勝手を、先生に詫言いました。



昭和55年(1980)頃 デカルト街アパルトマン書斎にて

三輪太郎 プロフィール

小説家・文芸評論家。東海大学教授。昭和37年、名古屋生まれ。早稲田大学第一文学部卒。文藝春秋で9年ほど編集に携わる。平成2年、群像新人文芸賞(評論部門)を三島由紀夫論で受ける。著作は『あなたの正しさと、はくのセツナさ』『死という鏡』(以上講談社文庫)『憂国者たち』『大黒島』(講談社)『村上春樹で世界を読む』(共著・祥伝社)など。

背景イラスト：井上佳子



平成8年(1996)11月 竹葉亭にて 左より 筆者、辻佐保子、辻邦生、装幀家・中島かほる、元中央公論社マリ・クレール編集長・井上明久

辻邦生山荘の軽井沢

軽井沢高原文庫は、軽井沢にゆかりの深い近代文学者の資料を収集・保存・公開するなどの目的で、1985年に塩沢湖畔に開館したささやかな文学館です。

当館はこれまで、年4回ほどの展覧会や、堀辰雄1412番山荘や有島武郎別荘“浄月庵”、野上弥生子書斎の移築保存、高原文庫の会や高原の文学サロンなどの催し、立原道造詩碑や中村真一郎文学碑の建立などを行っております。

2012年、当館理事だった辻邦生先生の軽井沢山荘を辻家からご寄贈頂きました。辻夫人の辻佐保子先生(お茶の水女子大学名誉教授)がご逝去された翌年のことです。

辻邦生山荘は、辻夫妻の仕事場として1976年に建てられました。設計は磯崎新氏。辻さんは、亡くなるまでの24年間、四季折々、ここで長編小説などの執筆を続けられたのでした。

ご夫妻の書斎が建物2階の両翼に配され、西に開いた大窓から周囲の森と浅間山が眺望できるという素晴らしい場所です。

辻さんは、岬の先のような、しかも下が崖になっている所に住みたいというのが理想だったそうで、そこは似た地形で、ここいいねと、山荘を建てる前から気に入っていたと、辻夫人の話です(「軽井沢高原文庫通信」75号)。エッセイ「風のトンネル」などには山荘をとり囲む自然の様子が生き生きと描かれています。

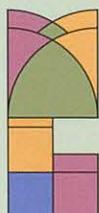
辻夫妻は軽井沢で、執筆の傍ら、隣人の磯崎新・宮脇愛子夫妻をはじめ、北杜夫、福永武彦、中村真一郎、加藤周一、水村美苗といった文学者、学習院大学の同僚の先生らと交流を深めていました。私も個人的な思



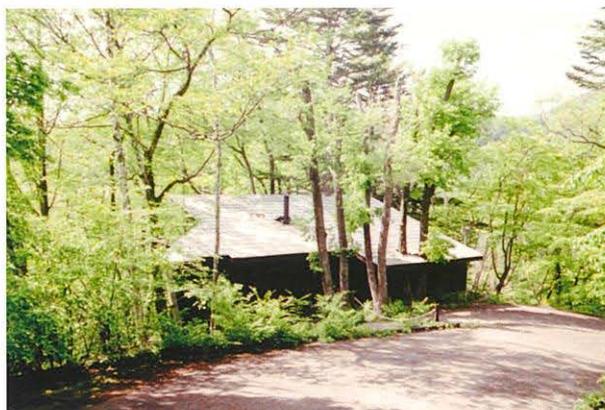
平成 21 年 (2009) 頃 山荘の辻邦生の書斎 (撮影：筆者)

ミュージアム・レター 第42号

令和元年 (2019) 12月20日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03 (5992) 1173
FAX 03 (5992) 9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>



い出がありますが、辻先生はいつもやさしく、紳士でした。

当館は、2009年夏、「没後10年 辻邦生展～豊饒なロマンの世界～」を開催しました。天皇皇后両陛下(当時)のご訪問という栄誉にもあずかり、辻夫人にご案内頂きました。

なお、当館は2014年から年複数回、辻山荘を特別公開し、見学会を行っています。今年で6年目、計17回を実施。毎回、全国各地から辻文学の愛読者の方をお迎えし、大変喜ばれています。

辻邦生山荘は書斎や調度など当時のままの状態を保っています。類い稀な作家辻邦生の創作現場を後世に伝える貴重な空間であり、大切に保存してまいりたいと考えております。

(軽井沢高原文庫副館長・大藤敏行)

「辻邦生生誕100年記念事業」

のお知らせ

小説家 辻邦生 (1925-1999) は、執筆と並行して約35年間にわたり学習院大学でフランス文学を教えました。史料館では、生前より辻と交流を持ち、執筆活動に関わる資料(自筆原稿、創作ノート、日記、書簡、蔵書、愛用品など)約4万点の寄贈を受け、文学研究に資するため、整理を進めています。また展覧会や講演会を設け一部の資料の一般公開も行っております。



昭和 49 年 (1974) 練習帆船“日本丸”にて

来春には辻が18年余り過ごした所縁の地、国分寺で文学講座も予定しております(恋ヶ窪公民館主催、講師：高橋裕子「辻邦生、その美術への眼差し」)。

この度、2025年に辻の生誕100年を迎えるにあたり、文学の枠を超え美術、音楽、映画など様々な分野の委員で構成した「辻邦生生誕100年記念事業組織委員会」を立ち上げました。名誉委員として辻邦生・佐保子夫妻と深くご親交のあった評論家・詩人の粟津則雄氏、小説家・精神科医の加賀乙彦氏、美術史家・美術評論家の高階秀爾氏のお三方をお迎えしております。また、辻邦生小委員会では長きにわたってご助力くださった故・高橋英夫氏の後任としてドイツ文学者の小塩節氏が委員に着任されました。今後、他機関とも連携し、書くことに情熱を傾け続けた辻の足跡をご覧いただけるような企画を考えております。

(辻邦生生誕100年記念事業組織委員会委員・学芸員 富田ゆり)